様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３４６０

研究課題名（和文）『雅言集覧』を中心とした近世国語辞書群の到達点に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Achievement Points of the Early Modern Japanese Language Dictionaries Centered on "Gagen Shuran""

研究代表者
平井　吾門（HIRAI, Amon）

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：８０７２２２１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、従来研究の手薄であった『雅言集覧』を中心として、近世国語辞書の価値を複合的に再検証するものである。『雅言集覧』において先行辞書『倭訓栞』への相補的な編纂状況が予想通り確認されたことにより、辞書を個別に評価していた従来の視点では、近世辞書の価値を正確に捉えられないことが明らかとなった。
　また、『雅言集覧』の編纂方針を探り、『源氏物語』の徹底的な調査を核としつつ、『枕草子』の用例を語釈に代えて効率的に利用する方針があったことを示した。特に『源氏物語』に関しては、より具体的な用例採取基準を明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　評価基準が明確ではなかった『雅言集覧』について、改めてその価値を示すことができた。特に、現代的なコーパスからは探り難い用例の検索や擬古文制作に活用しうることが明確となり、古典理解に繋がる古語作文にも大きな貢献が見込まれる。
　近世辞書の価値が大きく向上したことから、辞書史において近現代辞書にもたらした影響も改めて見直されることになる。また、近世辞書の影響は知られつつも、従来採取の基準が未解明であった近現代辞書の古典語用例について、特に『枕草子』の果たした役割が明確となったため、従来捉え切れなかった用例選定基準や語釈方法を復古させることに繋がり、辞書研究の発展的課題を炙り出すことができた。

研究成果の概要（英文）：This research is to re-examine the value of Japanese dictionaries on Edo era in a complex manner, centered on "Gagen Shuran", which was a thin study.It was confirmed that " Gagen Shuran" was compiled as a complement to the preceding dictionary "Wakun no Siori".As a result, it became clear that the value of early modern dictionaries cannot be accurately grasped from the conventional viewpoint of evaluating dictionaries individually.
In addition, by exploring the compilation policy of "Gagen Shuran", it was shown that there was a policy to efficiently use the examples of "Makura no Soshi" instead of narratives. On the other hand, with regard to "The Tale of Genji", we were able to clarify more specific example collection criteria.

研究分野：国語学史

キーワード：国語辞書　国語辞典　辞書史　近世辞書　国語学　日本語学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

国語辞書に関する大衆の興味関心は常に高いものがあり、近年、それに応える形で辞書編纂の現場を伝える新書類が数多く出版されてきた。しかし、学術的には不正確な情報も多く、特に、国語辞書史の中でも現代に直接繋がっていく江戸時代の国語辞書について、一般書で正当な評価を受けることは少なかった。

そもそも近世国語辞書についての研究も全体的に遅れており、従来は主に、近代国語辞書がどのように近世辞書を受容してきたか、という視点から研究が行われてきた。近代辞書が、近世辞書の長所を抽出して継承したことがたびたび指摘されてきたが、近代辞書が近世辞書を凌駕しているという前提があり、近世辞書から継承できなかった特長が却って見え難くなっている問題があった。近世国語辞書そのものに焦点を当てた研究も、主要な書籍についての書誌情報や性格の概観は報告があったものの、確実なデータに基づく引用文献や収録語彙の体系的な分類、諸本調査といった基礎研究はほとんど進んでいなかった。

そのような中で、報告者は辞書の語釈記述や立項態度に着目し、見出し項目や語釈をデータベース化して比較検証する手法によって、近世中期に成立した『倭訓栞』が現代に繋がる国語辞書としての体裁を先駆的に整備していく様子を解明してきた（JSPS 科研費若手研究（B)26770159「倭訓栞を中心とした近世国語辞書の記述史に関する研究」に基づく一連の研究より）。その過程で、後発の近世辞書『雅言集覧』が『倭訓栞』の存在を強く意識した語釈を行っており、読者による『倭訓栞』の利用を前提とした上で、その不備を補うように編纂を進めているという仮説が浮かび上がった。両書を個別に評価すれば近代辞書に対して見劣りするものの、各々の長所を補完させて捉えることで、近代辞書に比肩し得ると評価できるのである。

この状況を受けて、『雅言集覧』が引用する『小倉百人一首』および『倭名類聚抄』の収録状況を基に編纂態度をサンプル調査したところ、『倭訓栞』の利用を前提としたように見える『雅言集覧』の編纂態度は、偶然ではなく意図的に行われた蓋然性の高いことが判明した。このような態度が総合的に確認できれば、近世辞書は互いの不備を補い合うことになり、近代辞書の前段階に位置するものであるという直線的で単純な理解は出来なくなってくる。

以上のように、これまでの研究の延長線上に、複数の辞書を総合的に考察するという課題が浮かび上がった。特に、『雅言集覧』については基礎研究も進んでおらず、先行書物との関係や編纂態度といった点で未解明の部分が多いため、細かいデータベースを作成した実証的な調査が必要であった。

２．研究の目的

本研究は、特に近世中に出版された『倭訓栞』と『雅言集覧』を核に据えつつ、近世辞書について複合的かつ体系的な比較研究を進めるものである。近世において後続辞書が先行辞書をどのように捉え、何を克服しようとしてきたのか、その結果としてどのような編纂態度が発現したのか、という従来に無い視点から「近世辞書全体での到達点」を解明することを目指した。すなわち、国語辞書史における近世辞書の再評価を目的としている。またそれにより、近代辞書との個別的な比較の中で不備の多さが指摘されてきた近世辞書は、飛躍的に価値が向上することが予想される。あわせて、近世の知見がその後どのように継承されたかを論じ直すことも可能となる。近代以降に継承されていない知見を洗い出し、国語辞書の要件を捉え直すことで、新たな国語辞書誕生にも繋がるというところまでが視野に入っている。具体的には次の各事項を進めていくこととなる。

(1)『雅言集覧』の基礎情報をデータベース化し、これまでに作り上げた『倭訓栞』データベースと合わせて、近世国語辞書の中核を為す情報が総覧可能とすること

(2)データベースを用いることで、印象論に基づく学術的に不正確な先行研究や一般書の解説に対して、近世国語辞書の実態を実証的に補訂すること

(3)近世国語辞書を総体として捉えることの有効性を示し、近世国語辞書への過小評価が訂されることにより、近世辞書と近代辞書の間で行われていた従来の比較研究に大きな転換を迫ること

(4)語彙や用例の選定基準と、語釈の記述方法を中心として、従来の観点では継承できていなかった近世の知見を掬い上げること

本研究において、近世国語辞書全体での到達点と、その中で近代国語辞書に継承されていない部分が明らかになれば、近代から直接的に継承発展してきた現代国語辞書の在り方そのものに変革をもたらすという意義がある。特に、従来の視点では捉え切れなかった近世辞書の用例選定方法や語釈方法を復古させることで、従来にない新たな国語辞書の形が誕生することが期待される。また、現代の国語辞書も、編纂者が相互に特色を意識し合うことによって変化を続けていると捉えられるため、現代の古語辞書・国語辞書の展開を国語辞書史の中に組み込むという課題へと繋がっていく。また、従来研究が進んでいなかった『雅言集覧』について、その編纂目的や編纂傾向などを明らかにするということもまた一つの重要な役割と認識している。

３．研究の方法

本研究では、『雅言集覧』について近代活字本の OCR および校訂によって対象範囲全文のテキストデータを整備する。それらに典拠名や語釈量、品詞分類などの情報を付与してデータベースを構築する。それをふまえて、『雅言集覧』の内部考証を進め、諸本調査で補訂した『倭訓栞』

データベースと合わせて、近代的視点から「不備」とされてきた近世辞書の特徴を解明する。そして諸本間で相互の参照を前提にした編纂態度があることを比較検証し、近世国語辞書が到達した知見について、「国語辞書群」としての総体を基に評価し直す。

具体的にはまず、研究の土台となる『雅言集覧』について順次テキスト化を行うため、専門業者に外注して明治活字本の一括翻刻を行う。データは最善の写版本によって随時校合するとともに、併せて『雅言集覧』に関する代表的諸本の調査を実施する。また、「用例の典拠」「語釈の客観性の有無」「語釈量」「収録語彙の位相・語種」といった点について、『雅言集覧』の見出し項目をタグ付けしていく。データベースを構築しながらも随時特定のタグによる集計を行い、『雅言集覧』の語釈量や収録語句の位相などについての調査結果を随時まとめていく。その際、典拠や位相に偏りが見られた場合、他の近世辞書や近代辞書との比較において重要な情報となるため、重点的に調査を進めると定めておく。諸本調査の過程で特に重要な資料が確認された場合には、他の調査に優先させる。

次に、近代国語辞書の特色に関する先行研究のまとめを行う。新たな知見を得ることよりも、『語彙』『言海』『日本大辞書』といった代表的な近代辞書について、近世辞書との差がどのように認識されてきたかという研究史をまとめていく。本来であれば、代表的辞書を個々にデータベース化して、比較対象として整備していくことが望ましいが、期間内に研究を遂行するため、最善の策として先行研究を渉猟しつつ有効活用することとなる。

そして、近世国語辞書における編纂態度の比較検証と評価を行うべく、調査結果に基づいて、諸本間で相互の参照を前提にした記述を各々から全て抜き出して検証する。『雅言集覧』については、これまでにサンプル調査として、報告者自身の目で書物を追って調査を進めてきているため、それをデータベース上で再度確認するとともに、見落とし等を補訂する。この中で、後続辞書が先行辞書のどのような点に不満を持ち、或いは敬意を払っていたのか、というスタンスを明らかにすることが出来る。その上で、先行研究の不備や特長をどのように扱っているかを確認する。相互補完的な編纂態度があるという仮説がすでに立っているため、それを多角的に検証することで、項目や典拠の選び方を通じて近世辞書の到達点を実証的に明らかにしていく。

以上の調査研究を通じて、最終的に近世と近代を繋ぐ国語辞書史の在り方を総括することが可能となる。

## ４．研究成果

各年度の実施計画に基づき、次の研究成果を得た。

(1)従来研究の指針が不明確であった『雅言集覧』について、研究手法や利用すべき本文、明治活字本利用の際の注意点などをまとめた。特に、従来は内容が江戸版本とほぼ等しいものであるという認識から、簡便な明治活字本の利用が一般的であったことに対して、その危うさを具体的な事例から示すことができた。具体的には、「おかし」「をかし」のような仮名遣いの在り方が異なることで、近世の書物の真髄を見誤る険性を指摘している。また、『雅言集覧』を利用する上で必要な親見出しと子見出しの区別が難解であることを改めて確認したほか、どの項目や用例が明治期に増補されたのかが明確でないため、明治諸本は補助的な利用に留めて江戸版本の確認が常に必要となることを示した。

(2)『雅言集覧』と『倭訓栞』との比較に際して、用例の位相差から代表的な和歌用例である「百人一首」および先行古辞書である『倭名類聚抄』を中核に据えて、用例の扱いと立項態度を検証した。それにより、『雅言集覧』では限られた紙幅の中で先行辞書を有効活用していた実態が明らかとなった。すなわち、『雅言集覧』では、『倭訓栞』の特徴を的確にふまえて自らの編纂態度に生かしていたことを確認し、誤謬や用例不足、出典の未詳といった『倭訓栞』の欠点を積極的に補訂する中で、用例中心の国語辞書として近現代にも通じる存在感を示すことに成功したことを指摘した。特に、古語用例に手厚い『雅言集覧』において、『倭訓栞』が採用していない『倭名類聚抄』を積極採用していることは、個々の辞書を個別に評価していた際には立項の偏りと片付けられてしまう事例であるため、両者の複合的な評価が必要であることも明確になった。『倭訓栞』との併用が前提にあるという視点は、『雅言集覧』の語釈が脆弱であるという従来の指摘についても再考を迫るものである。「百人一首」についても、『雅言集覧』では『倭訓栞』が扱わない例を狙い撃ちしていく様子を具体的に示すことができた。

(3)『倭訓栞』では、改稿が進む中で扱う対象の射程がより広範な時代へと広がっていき、「百人一首」に対する意識も膨れ上がっていく様子を明らかにした。『倭訓栞』の「百人一首」について、諸本すべてにわたって悉皆調査したのは初めてのことである。『倭訓栞』において、編纂が進む中で、中世以降の国語を広く扱うようになっていく際に、「百人一首」に関連した記述がその方針転換に大きな役割を果たしていたことを指摘している。『倭訓栞』編纂を後半生のライフワークとした編者にとって、自ら「百人一首」を論ずるような余力はなく、むしろ、それは優れた先学に任せて、「百人一首」の解釈をも可能にする辞書としてまとめ上げることに注力するという傾向が見られるのである。『倭訓栞』の編纂方針自体も、先行書籍を引用或いは孫引きの形で有効利用することで、幅広い語彙を収集する方向にシフトしたと考えられる。このことは、これまでの研究内容とも合致する内容でもあり、諸本間だけでなく個々のバージョン内でも通時的な研究が可能であるという従来の主張を具体的に裏付ける形となった。また、『倭訓栞』が「百人一首」を論じる際に大きな役割を果たしたのが賀茂真淵『百人一首古説』であることを具体的に指摘した上で、その参照の痕跡が最終的に消え去っている様子が明らかとなった。『倭訓

栞』の編纂過程の一端を類推させるとともに、後続の学者たちへの影響も論じることができた。

(4)和歌と古辞書の扱いについて見通しを得た上で、『雅言集覧』に収められている散文用例の分析視点を確立した。特に、『雅言集覧』で利用されている和文用例では『源氏物語』が圧倒的に多いことをまず確認した上で、次いで『枕草子』が不自然なほど多用されている実態を数値として示すことができた。それをふまえて、『枕草子』が語義説明のための用例として、『源氏物語』の穴を埋める形で利用されているということを明らかにした。『雅言集覧』において、『枕草子』の用例が引かれる際には、文脈を含めて語義も伝わるような例を示すことが圧倒的に多く、特に、用例が和歌や漢文用例も含めて『枕草子』しかないようなものについては、明確に語義に迫れる用例を提出していた。一方、『枕草子』を含めて一つの項目に用例が複数ある時には、個々の用例ではその語義を伝える明快さは失われている。逆に言えば、語義を明確にできる用例が無いからこそ、様々な角度からの用例を積み重ねていくのである。この調査により、『雅言集覧』において多量の用例があること、そして項目ごとに用例の多寡に差があることの理由について、「語義の決め難い用例を集めて蓋然性を高める」「語義の明確な用例は単例でも構わない」という編纂方針があったことを浮き彫りにすることができた。また、『枕草子』と辞書記述の親和性が高いという点からは、ともすれば日本語研究において軽視されがちな『枕草子』の再評価にもつながる。従来、接続がうまくいっていたとは言い難い文学研究と語学研究の架橋として、近世辞書研究を位置づけることの可能性を示唆することができたと言える。

(5)『雅言集覧』が、『源氏物語』について徹底的な調査に基づいた用例採取を行っていることを具体的に示した上で、用例採取において「初出例を押さえる」「全体の巻にわたって用例を採取する」という方針があったことを明らかにすることができた。『雅言集覧』の用例採取方針について言及するのは、従来の研究には見られなかった大きな成果である。そして、現代日本語の辞書制作現場では立項の選択肢に入らないような語形や複合辞について、別の見出しとして立てるという編纂態度から、『雅言集覧』が古語作文のために確実な証拠を示すためのものだという蓋然性の高さを論じた。古典語の意味や文法の研究が進んだ近世において、「意味・文法的には可能だと考えられる擬古文」と「実際に古典に出現する形」を峻別し、「理論上はあり得る組み合わせであっても実例では一切現れない」という情報を提供する編纂意図を仮定することができるのである。古典語のネイティブになり得ない鎌倉時代以来の葛藤を受けて、近世国学研究が示す理論と実例の往還によってそれを可能たらしめようとする『雅言集覧』の本質を論じることができた。

(6)社会的な研究成果の還元として、学校教育の中で国語辞書を活用する際に留意すべき点について、本研究を通じて得られた知見をもとに紀要の形で示すことが出来た。また、近世国語辞書を現代的な視点を見据えて研究することの社会的意義について、学会における講演の形で提言することもできた。これらの知見は、国語辞書編纂の仕事における具体的な項目執筆等の折に生かされているものでもある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>平井吾門 | ４．巻<br>21 |
| ２．論文標題<br>『雅言集覧』の散文用例試論 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>近代語研究 | ６．最初と最後の頁<br>159-177 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>平井吾門 | ４．巻<br>118 |
| ２．論文標題<br>国語科で国語辞典を利用する前に考えるべきこと | ５．発行年<br>2017年 |
| ３．雑誌名<br>弘前大学教育学部紀要 | ６．最初と最後の頁<br>9-17 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>平井吾門 | ４．巻<br>95(2) |
| ２．論文標題<br>『雅言集覧』に見られる『倭訓栞』への意識 ： 百人一首歌および『倭名類聚抄』の扱いを通して | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>国語と国文学 | ６．最初と最後の頁<br>53-68 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>平井吾門 | ４．巻<br>20 |
| ２．論文標題<br>倭訓栞と百人一首 | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>近代語研究 | ６．最初と最後の頁<br>151-170 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>平井吾門 | 4．巻<br>19 |
| 2．論文標題<br>『雅言集覧』の用例における『源氏物語』の扱い | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>立教大学大学院日本文学論叢 | 6．最初と最後の頁<br>93-104 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>平井吾門 | 4．巻<br>26 |
| 2．論文標題<br>『雅言集覧』「ろ」「は」部における『源氏物語』用例 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>立教大学日本語研究 | 6．最初と最後の頁<br>178-185 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>平井吾門 |
| 2．発表標題<br>国語辞書史における近世 |
| 3．学会等名<br>2018年度立教大学日本文学会（招待講演） |
| 4．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>平井吾門 |
| 2．発表標題<br>『雅言集覧』における散文用例について |
| 3．学会等名<br>2018年度第２回近代語学会研究発表会 |
| 4．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>平井吾門 |
| ２．発表標題<br>『雅言集覧』の用例における『源氏物語』の扱い |
| ３．学会等名<br>第117回 訓点語学会研究発表会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|